

Wave

美術館だより
vol.34
NOV 11 2023



ウジェーヌ・カリエール 《眠る子供たち》 1903年頃

特集 拝啓、前川先生

インタビュー Negicco育ての親・熊倉維仁さん

拝啓、 前川先生



1985年に開館した新潟市美術館は、新潟市出身の建築家・前川國男(1905-86)による最晩年の建築です。ここを棲み家とする学芸員たちが、日頃の思いを前川先生への手紙にしたためました。

この建築について、語りだすと止りがないのですが…その美しさの最たるところは、タイルではないかと思えます。正面入り口に入ってすぐの風除室など、さっと通過されてしまいがちですが、壁面に敷き詰められたほっそりした赤茶のタイルが色鮮やかで思わず目を奪われます。天井にはこっくりとした青が配色されていて、小さい空間ながら色の対比が深く印象に残る演出です。そのほか、外壁、内壁、床面のいたるところに、様々な色とかたちのタイルがあてがわれ、異なる模様を生み出している…細部に目をやればやるほど、はっとさせられます。

しかしこの魅惑のタイルが時としてわれわれ学芸員に牙をむくのです。台車を押して通るとがたがたと揺れ、作品をいざ運ばんとするときにはヒヤヒヤし

ます。青バニヤを床に敷くようにして対処しますが、タイルも、作品も、傷つけやしないかとドキドキします。かけがえのない魅力のひとつなのですが、使い勝手との両立を考えると悩ましい側面もあるのです。

タイルといえば…前川先生が世を去り、しばらくして常設展示室が増築されました。1994年のここのゆるいカーブを描く壁が作品も鑑賞者も心地よく包み込んでくれる展示室です。外壁にはタイルが用いられています。すっきりとして小ぶりなかたちです。オリジナルと同じではないけれど、オリイグリーンの色合いと絶妙なグラデーションに、もともとこの建築に対する確かなリスペクトが感じられます。

〈学芸員 呉矢野 あゆみ〉

泉下の先生は、ご自身が遺された作品のたどる運命を、どのようにご覧なのでしょう。「日本最古のモダニズム建築」たる第一作《木村産業研究所》(弘前市、1932)の重文指定(2021)は慶事でしたが、他方で先生の真骨頂というべきお仕事も姿を消しております。時代と社会の要請に真摯に対峙された先生は、それも建物の寿命と受け止めておいでか。建築界の不屈の闘將は、今も夜々の苦渋を美しい音楽に紛らせておられるのか。

新潟市美術館の「海の庭」から差しこむ朝日の中、展示室へのスロープを上がっていくとき、しみじみと前川建築で働く幸せを感じます。広義の「モダニズム」は人間性の解放であるとして、その意味でも先生は「モダニスト」であった、と思うのです。だからこそ私たちは、先生を安易に偶像化するようなことは慎まねばなりません。

果たして、建築家の明るく開かれた理智と夢想は、この館の学芸員たちにも共有されてきたのでしょうか。

例えば、ココで開かれてきた展覧会、集められてきた収蔵品は、この建物に引き立てられ、その空間を引き立たせるものであったか。むしろ、互いがスポイルされるような場面もなかったとは言えませんが。

なお先生に思いあそばさず、この建物のみならず、前川建築との細大にわたる調整であり、時に闘いでもあるような、私たちの仕事をも見守って下さることを願います。ココでは、前川國男は今なお歴史ではないのです。

〈学芸員 藤井 素彦〉



はいめてお手紙を書かせていただきます。縁あって、前川先生が晩年に設計された美術館で働いている者です。

私がこの美術館に来てまず学んだのは、外壁が「打ち込みタイル」で出来ている、ということでした。建築に疎い私は、ぶしつけながらも「前川先生は外観の美しさだけでなく、それを構成するものの工法にもこだわっていたのだなあ。」と感じました。

美術館で過ごす中で、建築の魅力にも気が付きました。特に建物内の丸みを帯びた壁は、お気に入りのポイントです。エントランス受付から二階へと向かう



階段の曲がり角は、ゆるやかな曲線を描いています。このからし色の壁と黒々とした硬質な床のタイルとのギャップが個人的にとってもツボです！美術館の建物が厳格になりすぎないのは、こういう部分があるからでしょうか。また、前川先生によるものではありませんが、常設展示室中展示室のなだらかにカーブした壁は、入り口から奥の作品まで見渡すことができず素敵です。点数の多い作品を一室に並べると、より作品がカッコよく見え良いなあ、と度々思います。このようなポイントに注目するようになったのも、前川先生の建物に触れたことがきっかけかもしれません。

来年の秋から美術館は大規模改修工事に入ります。今後、建物がどうなっていくのかわかりませんが、前川先生が設計して下さったこの場所で過ごせてよかったです。ありがとうございました。

〈学芸員 岡村 秀美〉

早いものでこちらに着任してから十年が経ちました。先生の作品には学生時代から神奈川県立図書館・音楽堂、東京都美術館など、最初はそうとも知らず、建築以外の目的で訪れていたものですが、ココで働くようになり、先生の空間に日々向き合うことになりました。

ツートンカラーのタイルカーペットをはがしてみたり、壁も黒く覆って真っ暗にしてみたり、家のようなものを建てたり、展示室ではずいぶんいろいろなことをしてきましたが、最近になってようやく、この空間が体に入って来たように感じています。どこに何を置か、間隔や高さはどうするか、などほんの些細なことではあるのです。展示プランも、図面を手に会場で脳内シミュレーションをして、何度も書き換えながら決めるのですが、それは作品と空間との対話を耳を澄ませることであり、先生の愛した、音楽を奏でることに似ているように思います。やっとちよっぴり、自分らしい音色が出ているかな、と思えるようになりました。

それでもまだ、歯の立たないところはいくつもあります。

ご無沙汰しております。お変わりなくお過ごしでしょうか。私は新潟市美術館に務めて、ようやく10年が経ちました。

思えば美術館が開館したのは1985年10月。先生が亡くなられたのは、翌86年6月でした。生前は聞く暇がなかったと思うので、今回あえて率直に言えば、この建物には働く上で不便なところが結構あります。展示室前のタイル床は、荷物を台車に乗せて移動するときにタギトします。実習室のど真ん中に柱があって、邪魔です。バックヤードの絶妙な位置に階段があって台車が通れず、いつも遠回りしています。事務所の窓が重くて開けにくいです。

こまごまありますけれど、それにも増して、美術館としての居心地の良さは格別だと断言できます。その理由も「広すぎない」「天井高や壁面の素材・色に変化があって、飽きさせない」「ガラス面が大きくて開放的」などなど、たくさんあります。

たとえば写真のこの企画展示室のガラスケースの脇、普段は可動パネルをしまっておくスペースの奥。そもそもココを素にすることは自体が大変で、パネルを全部出して、壁付ケースの前もなんとかしないと見せることができない。でも、天井にはダウンライトもついていて、何かびったりはまれば、ちょっと特別感のある展示になるような気がします。

モダンなホワイトキューブの展示室に、和の「床の間」が紛れ込む。一見無駄のようにも見えるこの空間は先生の遊び心だったのでしょうか。いつかこの場所を使いこなせてこそ、本当に先生の建築がわかる日がきたといえるのかもかもしれません。

〈学芸員 荒井 直美〉

いま、先生に一番ご報告したいのは、敷地内の植物の成長です。特に「山の庭」のプラチナは、先生がこだわって選んでくださったとか。生前は低木だったと思いますが、開館して38年目の現在、大きく育って、春夏秋冬、晴れた日は穏やかに、嵐の日にはダイナミックに躍動しながら、来館者や職員を包み込んでくれます。私は梅雨時、豊かな葉っぱを潤わせて、根元に苔を繁らせた姿が大好きです。機会があったら、見に来て下さい。

最後になりましたが、季節の変わり目、どうかどうかご自愛くださいませ。

〈学芸員 上池 仁子〉



今年の新潟は全国的にみても暑く、先生にはきつと考えられないほどの灼熱の日々が続きました。そんな猛暑も落ち着いた頃、この10月に美術館は38歳を迎えました。海辺の気候も考慮した設計のおかげか、きれいに管理されていますね、との声もいただく一方、経年変化は避けられず、これまで3度の大規模改修工事がありました。竣工当初の姿と比べると、大なり小なり、あちこちの変化に驚かれるかもしれませんが、私はここ数年の姿しか見ていないので、今の建物をすべて先生のオリジナルだと勘違いしてしまうこともありました。

「山の庭」もその一つです。なだらかな斜面に沿って清々しく立つプラタ、地面のタイル、どんぐりのような腰掛と最上層の彫刻、そしてコンクリート壁とが調和する風景。建物の中からの眺めも癒されるこの場所も、竣工時の写真を見るとだいぶ様子が違います。木や腰掛の配置はランダムで、地面のタイル

竣工時当時の「山の庭」→

ルは正面駐車場や西大畑公園と同じ赤褐色のもの。海の庭の水溜めと公園の池が一直線上に配されているのと同じように、山の庭も公園との連続性が意識されたものとみえます。

今と昔、どちらが良いかという話ではなく(その点でいうと、正直、今の庭が好きです…)、先生の考えや設計した空間が忘れられてしまうのは惜しいことです。来年4度目の改修工事を控えるこのタイミングで、改めて「先生らしさ」と「変化したこと・していくこと」を、繰り返し確かめていきたいと思っています。

〈学芸員 菅沼 楓〉



デザイナーの服部一成さんの書体に代わっているからかもしれませんが、このおにぎりのような角の丸い形は、前川さんのオリジナルのデザインだとにらんでいます。

「かどまる主義」と呼ぶたい衝動にかられますが、館内の随所にアールと呼ばれる曲面・曲線が見られます。それはこの美術館の特徴のひとつとなっています。主要な壁面が接する角も丸くなっていますが、それは印象を柔らかくすると同時に、直線を1本減らす効果もあるのでないか、という気がしています。これにお答えいただくのは無理ですね。

ところで、おにぎりですが、こんな些細なデザインを褒められて本不意でしょうか。それともよく気がついたね、とおっしゃっていただけるでしょうか。どちらにしても、好みのディテールを探すことはやめられませんが。

〈特任館長 前山 裕司〉

道路に面した鉄柵のところにある、美術館の裏口というか、通用口の「管理入口」の案内表示、覚えていらっしゃるでしょうか。おそらくほとんどの来館者は目にしないものですが、美術館の職員も気に留めていないでしょう。

お忘れかもしれませんが、簡単に説明します。道路側に連続する鉄柵と鉄扉がありますが、通用口の鉄扉を支える柱、H形鋼ではなく、断面が+になるように溶接した鉄の柱が立っています。その上に角が丸い三角形がのっているのですが、その可愛い案内表示のことです。

見たことない、と言われますか。それは文字が、2015年の改修工事の時に



表紙 | 作品と作家④

《眠る子供たち》1903年頃

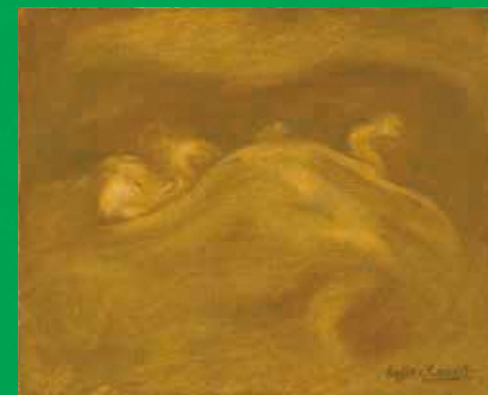
ウジェーヌ・カリエール CARRIÈRE, Eugène (1849~1906)

油彩・カンバス

本作の子供たちは、どんな様子に見えますか。

ぼんやりとした描写は輪郭線や奥行きもはっきりせず、むしろ一つの解釈を拒んでいるように感じられるかもしれません。それでも、例えば「2人の子供が一枚の毛布に包まっている。左側の子は右を向いていて、右側の子は手が毛布からはみ出ている」と、一旦みることはできそうです。そして、しなやかにうねる筆跡が手ごかりに、画面の明るい部分に眼を凝らすうちに、徐々に細部も浮かび上がってくるはず。左の子はおとなしく寝息を立てている」「右の子は大きく寝返りをうったところだ」というように。じっくりと読み解いていく時間の味わい深さは、カリエール作品の特質です。とりわけ、本作のような、家庭内の光景を描いた作品には、モデルに対する画家のあたたかな気持ちを追体験できる瞬間があります。

1880年代半ばから1900年代初頭、カリエールは本作のように褐色のモノクロームによる臙気で神秘的な表現によって、フランスの人気画家でした。ちょうど、印



象派の画家たちが、色鮮やかに都市生活や郊外の自然を描いて躍進していった時代です。彫刻家オーギュスト・ロダンは、一塊の素材から像を彫り出す「丸彫り技法」に例えて、カリエール絵画を讃えました。色彩も説明的な描写も極限まで削ぎ落としながら、絵画面に確かなボリューム感を浮かび上がらせる表現には、造形的な挑戦が潜んでいるのです。

2023年コレクション展3では、本作をはじめ23点のカリエール作品を展示します。

(学芸員 上池 仁子)

学芸員のハマリごと

普段は車移動が多いのですが、時間があるときは県内の在来線めぐりを楽しみにしています。最近だと上越線に初乗車しました。新潟ではおなじみ「ハムたまごサンド」色の車両で、ループ線の、山の中をぐるっと一周する珍しい体験に心が躍りました。それから数日後のこと、上越線が昭和6年(1931)に東京-新潟間で全線開通した時に作られた記念の絵葉書を偶然みつけました。萬代橋と柳の木を背に芸妓のシルエットが写る、モダンなデザインです。90年ほど前は「これぞ新潟」なイメージだったのでしょう。今の新潟らしさは何だろうと思いつつ、まだ見たことのない風景を探しに、次はどの路線に乗ろうか路線図を見ながら画策中です。(学芸員 菅沼 楓)



はがき下、太田木雨の「柳あり…」の句は「NEXT21」脇に句碑が建てられています

編集後記

拝啓、前川先生。今回は先生宛とかこつけて美術館の建物について好き放題書いてしまい、大変失礼しました。建物に愛着を持っているからこそその、熱のこもった各々のメッセージを、先生はどのようにお読みになりましたか。感想も伺いたいです。全国各地に建つ前川建築の動きを巡り、きつとお忙しくされているでしょう。来年度には改修工事も控えていますので、当館の行く末を見守っていただけると嬉しいです。(学芸員 菅沼 楓)

熊さん、ゼロ年代新潟で闘う



Negiccoの街頭ライブをステージ裏から見守る熊倉さん
2023年10月15日「古町どんどん」特設ステージ
新潟市中央区古町通七番町

interview



話が深くなるにつれていく熊倉さん
2023年9月25日

くまくら よしひと 熊倉維仁、Negicco 前夜、俺の敗け方

—— 前人未踏の結成 20 周年、新潟発地アイドルユニット Negicco の Nao☆、Megu、Kaede は、今や 3 人ともに妻として母として、そしてなおもアイドルとして、多くの人々を幸せにし続けている。新潟市美術館での展覧会「あしたもアイドル Negicco のアートワーク」の開催（2023 年 11 月 18 日～2024 年 1 月 21 日、企画制作：伊藤岳、EHクリエイターズ雪田容史）の機会に、Negicco の育ての親・熊倉維仁さんに、「彼女たちに出会うまで」のお話をうかがった。

—— 熊倉さんは 1952 年生まれ、東京でデザインを学び、新潟市内で広告デザイン・企画・営業、イベントプロデュースなどのキャリアを積んだのち、2000 年 48 歳で音楽業界へ。2005 年より Negicco の専属マネージャー。現在は株式会社 EH クリエイターズ会長。ブルースシンガーとしても活動。先ごろ、新潟市中央区古町通六番町の老舗喫茶店の経営を引き継ぐことが報じられた。

—— これは、新潟のストリート文化のグランドマスターによるオーラル・ヒストリー、血と汗と涙の「読むブルース」である。

聞き手：藤井素彦、菅沼楓（新潟市美術館学芸員）

—— 40 代の終わりに、広告会社から音楽の世界に転職されました。

広告会社のデザイナーは、クライアントの思いを営業経由でしか聞けないんですよ。営業が一番クリエイティブでないダメだと考えました。それで、会社にイベント制作部というのを作ってもらって、「新潟 CLUB JUNK BOX」っていうライブハウスに、音楽イベントの営業に行きました。

その社長はブルースバンドやってて、なんとメジャーデビューまでしてた。俺もブルース好きですから、ウマが合ってた。「こんどライブやるからおいで」って誘われて。行ってみたら、いきなりステージから「友達の熊倉さん来てるから、歌ってもらいましよう」って。まだ 1 回しか会ってねえのに。歌詞もなんも浮かばねえから、店のメニューから、コード進行に乗せて、「エチゴオ、ホクセツウウウハハ」みたいに歌ったら、お客さんめちゃくちゃ喜んでくれて。あいつのギターは響きが違うんですよ。おかしなヤツで、ポロイアメ車乗って見栄張って、「俺らやっぱり芸能界だから」ってね。今でも好きですよ。

—— そのライブハウス「新潟 CLUB JUNK BOX」に入社するんですね。

ジャンクボックスの社長が、經理畑出身の男に代わって、その彼の発想が面白かったんですよ。当時、ジャンクボックスは新潟・長野・仙台の 3 店舗。このノウハウがあれば、日本全国にライブハウスを展開できるじゃないかって。そこにいるんな才能を見つけて、育てる。俺はそれに賭けました。パブルが弾けた後、もういちど夢が見れると思った。2000 年、48 歳。



パブル景気の時代、広告会社での熱狂の日々を語る熊倉さん

—— ジャンクボックスが入っていたのが、カミーノ古町（新潟市中央区古町通七番町、現在は NSG スクエアが建つ）でした。

7 階に映画館。ジャンクボックスは 6 階でした。タワーレコード、楽器店、小物屋、雑貨屋、カミーノにはお洒落な店いっぱいありましたよ、レストラン街もあって。同じ七番町の大和（本社金沢市のデパート、2010 年閉店も元氣だったし。西堀ローサ（西堀通の地下街）には、渋谷系のアパレルショップとか、大きなユニクロがあったり。なんせ古町（中央区古町通一帯、新潟市の中心街の一つ）は若者で賑わってましたね。

でも、そろそろ翳りも見えてました。お洒落して出かけるのが、街から消えはじめてた。ナンパしたり・されたりする店とか。高い服屋とか。これからどう変化するんだろう、って不安がありましたね。

—— カミーノ古町が閉鎖されたのは、2001 年 1 月です。

トドメがカミーノだった。俺がジャンクボックスに入ってたんですけど。それで俺、当時は商店街の人たちと何の付き合いもな

こぼれ話「あこがれの人」：東京では代々木上原三丁目に住んでたんですよ。なんでかっていうと、同じ町内に原田芳雄（1940～2011）がいたからなんですよ。芳雄さん、こんなカッコいい男いるかって。会えるかなあって。会えなかったですけど。

かったけど、「これいいんですか。カミィノがなくなる。仕方ないで終わるんですか。何とか考えませんか」っていうようなことを話した覚えがあります。その後、商店街の人たちにも、すごいお世話になるんですけど。

管財人の弁護士が来て、「ま、準備もあるでしょうから、退去は1ヶ月後で」って。めっちゃ乱暴です。次の店を準備するにしても、1か月じゃ無理ですよ。でも弁護士は「とっとと出ていけよ」みたいな感じだった。「なんだこの野郎」って思って。「若いヤツらが音楽に夢を持って、マジメに働いてるんだ」って。スケジュール帳見せて、「1年先まで埋まってるんだから」って。そういう話を段々していったら、納得してくれましたよ。期限を延ばしてくれました。「おざ野」っていう料理屋さん（西堀通六番町に移転、2023年閉店）と、ウチらが最後。そこのご主人とも最後は戦友ですよ。

移転先は同じ古町にこだわろうって決めてた。この街で、音楽文化にこだわろうって。いろいろ探した中で、W-I-T-Hビル（東堀通六番町。2010年閉店）に交渉に行ってる。俺らが入ると、こんだだけシャワー効

初めて行きました。友達で紹介で。だつて、夜中にファイトと目が覚めて。カネどうしようと思ってる。汗ダラダラ落ちてきて。そんなのが結構つづいたんですよ。その先生に「よく立ってられますね、よく歩けますね」って言われました。それでね、「あなた、自分のこと信じられますか？」って聞かれたんですよ。信じます、って答えたら、「じゃあ、何も心配ないじゃないですか」って言うんですよ。それ言われたら、めっちゃ軽くなった。なんとかなるだろうって思った。

会社を買い取ってくれるところがあって、色々あって、その倒産劇が終わったあと、5年くらい経ってからですかね。お互い声もかけずにいた社長と、久しぶりに飲もうぜって。同じ夢を見て、同じ釜の飯を食ったもん同士で。俺、男だと思えます彼も。一言もグチ言わなかったですからね。そりゃあ大きな壁だったんですよ。でも、いま思えばツライとは思ってないんですよ。それも楽しかったですよね。

——ジャンクボックスの倒産と、Negiccの結成が、同じ2003年ですね。

果（上階から下階への人の流れによる全店の売上増加）ありますよって。ちようどフロアが空いてた。工事もなんとか退去期限に間に合わせて。

——ジャンクボックスの経営は大変だったんですね。

仙台店の月あたりの売り上げは、新潟店の倍でした。人口の違いですよ。じゃあ、東京にも出すべ、ってなるでしょ。でも、場所が悪かった。浜松町駅から歩いて30分。そんな不便なところにキャパ500人のライブハウス、最初の1年ずっと赤字。ほかにジャンクレコーズっていうレーベルも立ち上げて、ライブハウスと両輪で行こうって。それが、CDの制作だけじゃなく、流通にまで手を出してしまった。

で、けっきょく倒産の方に行くんです。みんなの給料払うために、俺は消費者金融のハシゴまできました。なんか、そういう役回りだったんですよ。それで、辞表出したことあるんですよ。「社長、悪いけどついていけねえ」って。でも、俺も取締役で、会社の負債かかえてるし。高岡奈央（熊倉さんがマネージメントしていたアーティスト）の

その2003年に、俺、あいつらが古町通七番町のストリートで歌ってる姿を見てるんですよ。こいつらしいなって。歌ってるのを、完璧に足を止めて、見てたんですよ。ちっちゃい子たちが一生懸命、歌ってる姿、歌声、声質。見てるんですよ。俺、アイドルなんか興味なかったですもん。ただ、アイドルということはサブカルなんですよね。サブカルとしてだったら面白い。俺、最初からサブカルだと思ってましたからね。

それから数年して、Negiccを預かってた代理店で、俺は囑託やってたんですけど、その社長が「熊ちゃん、おまえ個人でNegicc引き受けてくれないか」って。俺、あの子たちは徐々に上がって行ってるのが分かってたんで。こんな借金まみれだけど、まあ、なんかいいかなと思って、引き受けますよって。同じ会社から「社員になるか」って誘いもあったんだけど、俺いいよ、Negiccの方が楽しいからって。ヒデってヤツがボランティアで助けてくれて、あいつら3人とヒデと俺と、5人だけで仕事を始めました。

衣装なんかも、カネないから。Naonの母ちゃんから電話かかってきて、「どこ

仕事も取ってたから。1週間後に撤回して、「辞めるつったけど、やる、最後まで一緒にやる」って言って。

あー、もういいや、って。もうこれしようがない、俺もこの船に乗った以上は仕方ねえな、最後まで見届けてやるうか、みたいな。頭がいいはずの人でも、凶悪事件を起こすほど自分を追い詰めることがあるのが、なんとなく分かるような気がしたくらい。でも、倒産だよなあ、この会社、って思いながら。もう、精神的にどうにかしてましたね。

親父とお袋が、小さな一軒家に住んでたんです。たまに顔を出すんだけど、俺がどんな仕事してるのか、一切言ったことないです。それがあつた時、親父が家の権利書、ボンと出して。「おい、これ使え」って。小さな家ですよ？俺、なんも言ってないですよ？

——すごいな……。

そんな時は、あの、相談。なんていうんですか。気持ちのケアの。相談するところ。

——カウンセリング？

そこでバーゲンやってる。いいのが3着あった。どうする？」って。それ買つてくれてよって。俺、めっちゃ借りがあつたよ、Naonの母ちゃんに。俺そのとき50過ぎですよ。いいおっさんだけど、女の子のこと全然わかってねえから。そのかたわら、借金返して。ハッハッハッ。

もう50過ぎでした。もう、なんでもこい、っていう。なんかツライ思い出が、あんまり無い。ないのがすごいですね。アホですね。だから感謝しかないです。

——ところでなんですけど、Negiccの呼び方って、「あいつら」なんですか？

最初「あの子たち」とか言ってたんですよ。そしたらconnieさん（音楽プロデューサー、結成当初からNegiccに楽曲提供が、「もう『あの子たち』じゃないですよ。子供じゃないですよ、30近いんだから」って。それで「あいつら」っていう。泣かせちゃったり、クツ投げられたり、それでも仲直りして。まあ、「あいつら」ですよ。

こぼれ話「熊さんの師匠」：東京で年に1回、陶芸の個展やって、その売り上げで1年食ってた。古い農家を改築した、素晴らしい家。遊びに行く、ワイン出してくれて、自作のスピーカーで昔のカンツォーネのレコード聴かせてくれて、「ふくよかだねえ」って。

こぼれ話「Negiccの強運」：T-Palette Records（タワーレコード傘下）が声をかけてくれて本当に良かった。老舗の大手レーベルだったら、1年でお払い箱だったかも。結成と同じ年（2003）には、たまたまconnieさんが東京から戻ってきてるし。あいつら運がいいんです。



2023年9月16日(土)

「前衛」写真の精神:なんでも ないものの変容 瀧口修造・ 阿部展也・大辻清司・牛腸 茂雄展の関連企画として、 おびなたきんいち 大日方欣一先生の講演会を 開催しました。

大日方欣一先生(九州産業大学芸術学部教授)は、筑波大学在学中に写真家・大辻清司のもとで学び、現在は武蔵野美術大学美術館・図書館の大辻フォトアーカイブの構築にも携わる研究者です。この度の講演会では、大辻が関わった実験映画「キネカリグラフィ」を起点として、4人に共通する映像制作との関わりに触れながらお話をいただきました。内容は展覧会の解説にとどまるものではなく、同時代の作品との比較、さらには、現代の写真家への影響にも注目し、大日方先生独自の視点からこの4人を見つめ直す貴重な機会になりました。当館では、新潟出身の阿部と牛腸の作品を所蔵していますが、大辻という存在を通してみることで、彼らの新たな側面を知ることができたように思います。

(学芸員 見矢野 あゆみ)



新潟に飛んだ埼玉の種

前山裕司 新潟市美術館特任館長

今回は新潟市の事業で私が関わっている障がいのある人のアート活動について書きたいと思います。

最初に障害者アートに関わることになったのは、勤務していた埼玉県立近代美術館で、念願のミュージアムショップの立ち上げに携わったことに始まります。1997年店舗を作る予算が通ったので、黒川紀章事務所の設計にダメ出しをし、開店に向けて仕入れの勉強をしながら商品を選べ、バタバタと8月6日に開店します。結局、学芸員の仕事をやりながら、実質的な店長(もちろん無給です)になりました。

その頃、障害者アートの世界では少しずつ作品の商品化の動きが始まっていました。先進的な活動をしていた平塚の「工房絵」後の「スタジオ・クーカ」(現在は「嬉々！CREATIVE」)から、商品の売り込みがありました。こういう形で初めて障害者アートに出会ったことは、とてもよかったと思っています。

査票をもとに選考会が開かれ、「埼玉県障害者アート企画展」が開かれます。ここにはそれこそゴミといわれそうな作品も含めて、毎年新たな発見がある展示となっています。

埼玉の話が長くなりましたが、2018年に新潟市に勤務するようになって、ここでも埼玉のような方式を導入できないかと考えていました。新潟市文化スポーツ部文化政策課の「文化芸術による共生社会推進事業」で、表現活動調査と展覧会をやることになり、2020年に初の調査を行いました。その年の回答が27、2021年は39、2022年は41と、まだ少数ですが、県と市という規模

その頃、障害者アートは、美術館で扱う美術とは別なものという考えがまだ強く、学芸員には美術の中の位置づけを研究してから近づくべき、といった雰囲気がありました。私は理論書や研究書を読むわけでもなく、商品としてどうか、という基準で接したので、面白いかどうか、これが今でも私の評価基準です。

その後、埼玉県福祉部の「障害者アート・フェスティバル」の実行委員となってから、本格的に関わり始めました。この実行委員会の事務局である障害者福祉推進課、社会参加推進・芸術文化担当(当時の名称は違いましたが)が中心となって、「表現活動状況調査」というものを2009年から行なっています。これは福祉施設や個人に調査票を送ってもらうというもので、毎年500程度集まっていた記憶がありますが、2022年も618名の調査票が集まりました。

の違いももちろんありますし、やはり浸透するまでは時間がかかるということでしょう。増えてきていることを希望と捉えたいです。今年度も調査をもとに、作品を選考して「あふれる思い ふれる気持ち」というタイトルで展覧会をやります。2024年1月から3月にかけて当館の市民ギャラリー、イオンモール新潟南、ゆいぽーとの3会場を巡回する予定です。

今年はまだ一つ、特別なイベントがあります。10月に始まった「さいたま国際芸術祭」の企画の一つとして「アート・ミーティング at さいたま国際芸術祭



土田学《無題》(部分)「アート・ミーティング at さいたま国際芸術祭」出品作

この調査を行うことにはいくつかの意味があります。まず、美術館の人間としては、これが将来の研究資料となっていくだろうという予測があります。つまり、例えば2010年代の埼玉県の障害者アートの表現がここに集約されているということです。

ほかには、福祉施設の間情報が流通すること、こんな落書き、「ゴミと施設や家庭で捨てられていたものが、作品として調査票に載せていいと気づききっかけになり、捨てられなくなる」という利点があります。そして調

「igataとSaitama」を行います。

これは、「表現活動調査↓展覧会」という方式の本来埼玉と、埼玉の種を移植した新潟の作家をあわせた展覧会です。会場は埼玉県立近代美術館で、11月29日から「第14回障害者アート企画展Coming Art 2023」と同時開催になります。

じつは障がいのある作家の中には、「障害者アート」という展覧会には出品したくないという人がいます。今回は普段「障害者アート企画展」に出品しない人を含めた埼玉の作家6人を、新潟の7人とあわせて展示します。現代美術の国際展という枠組みだからこそ可能になった展覧会です。

